

ヲ鑑定スベキ事ヲ予ニ命セリ。依テ予ハ該鑑定書(拔抄)並ニ證人立野タツ
訊問調書ヲ審閱シ、交付セラレタル腎臟二個ヲ詳細ニ肉眼的及顯微鏡のニ檢
査シ、彼是ヲ綜合シテ此鑑定書ヲ作成ス。

甲、検査記録

上、一般検査

(一)、依テ予ハ之ヲ檢スルニ容器ハ直徑一四・五糎ノ圓形ノ蓋ヲ有スル、周圍
五四・〇糎、高サ一四・〇糎徑ノ淡黃灰色ノ磁製壺ニシテ其表面ニ青キ不規
則ナル模様二個ヲ有ス。

(二)、蓋ヲ除キテ檢スルニ、「フオルマリン」液中ニ白布ニテ蔽ハレ居ル甲、
乙二個ノ人體腎臟ヲ見ル、以下其性狀ヲ記載セン。

大サ、甲 一一・〇一六・〇一四・〇糎徑、

乙 一一・〇一五・五一四・五糎徑、

莖膜ハ左右共稍剝シ難シ、表面ニハ左右共ニ小ナル多數ノ癰痕收縮様陷凹
アリ。

剖面ヲ檢スルニ甲腎ハ皮髓兩質ノ別不分明ニシテ、皮質ハ薄シ。乙腎ハ皮
髓不分明ナレ共、甲腎程皮質薄カラズ。

下、顯微鏡の検査

(三)、此等ノ腎臟ノ種々ノ個所ヨリ適宜數個ノ小片ヲ採リ、之ヲヨク水洗シ
タル後一〇%「フオルマリン」液ニテ三日間固定シ、水洗シタル後先ッ凍
結ニヨル切片ヲ作製シテ

A、「ヘマトキシリン、エオジン」複染色
B、「ズゲン、ヘマトキシリン」複染色

ヲナシ、更ニ他方ニ於テハ、該小片ヲ五〇%、七〇%、八五%、九四%及
無水等ノ酒精液中ニテ各一日間硬化ヲナシ、續イテ三〇%、五〇%及七〇
%「クロロホルム酒精」及純「クロロホルム」ニ各二十分間浸漬シ、更ニ進
ンデ「パラフィンオーフェン」中ニテ溶解セル「クロロホルム、パラフィン」

(融解點攝氏四八度ノ「パラフィン」ヲ「クロロホルム」ニ飽和溶解セルモノ
)、第一「パラフィン」(融解點攝氏四八度)及第二「パラフィン」(融解點攝氏
五〇度ノモノ)、ニ各十分間、第三「パラフィン」(融解點攝氏五三度ノモノ)
ニ二十分間浸漬シテ後「パラフィン」ニテ包埋シ、之ヲミノール氏「ミクロト
ーム」ニテ五「ミクロン」ノ厚サノ切片ニ薄切シ、「オブエクトグラス」ニ固
着セシメ、之ヲ一晝夜三十七度ノ孵卵器中ニ收メテ乾燥セシメタル後「キ
シロール」液ニ十分間、無水酒精ニ三分間、漸次低下のニ九四%、八五%、
七〇%、五〇%ノ酒精中ニ各三分間浸漬シタル後ヨク水洗シテ

C、「ヘマトキシリン、エオジン」複染色

D、「レフレル」氏「メチレン」青單染色

E、「ヘマトキシリン、エオジン、レフレル」氏ノチーレン青複染色

法

F、グラム、ワイゲルト氏複染色法

G、バツベンハイム氏複染色法

H、ワンギーソン氏複染色法

等ヲ施シテ顯微鏡ニテ檢シタリ。即チ上記數個ノ小片ヨリ製セル切片ノ檢
査所見ヲ綜合的ニ述ブレバ左ノ如シ。

(四)、凍結切片ノA、「ヘマトキシリン、エオジン」染色標本ヲ檢スルニ、細
尿管ノ實質上皮細胞ハ廢類シ、一般ニ染色不良、特ニ核染色不良トナリ、
其狀態ヲ精確ニ記載シ得ズ、又其間腔ニ圓壘モナキガ如シ。絲綫體モ同様
ニシテ、結締組織ノ増殖及硝子樣變性アリトモ思ヘズ、間質ハ幾分肥厚シ居
ル様ナルモ著明ナラズ。如上ノ變化ハ腎臟ノ表面ニアル陷凹部ニ於テハ特
ニ著シ。又血管ハ充盈ス。所々ニ極メテ僅カニ圓形細胞ノ集積アリ。サレ
ド他ニ粗大ナル病的變化ヲ認ムル能ハズ。

1、「ヘマトキシリン、ズゲン」複染色標本ヲ檢スルニ脂肪變性ノ如キハ
見ル能ハズ。

(五)、次ニ「バラフィン」色埋切片ヲ檢スルニ

C、「ヘマトキシリン、エオジン」複染色標本ニテハAニテ述べタル所見ト同ジ、即チ實質及間質ノ構造ヲ十分正確ニ檢スル事ハ不可能ナレドモ粗大ナル病的變化ハ見ル能ハズ。

D、レフレル氏「メチーレン」青染色標本ニ於テハ、髓質ノ腎盂ニ近キ部分ノ比較的大ナル血管内ニ於テ多數ノ葡萄狀球菌ノ聚落ヲ見ル、又細尿管ノ間ニアル毛細管ニモ所々ニ同様ナル球菌ノ聚落少許存在ス。

更ニ又該球菌ガ細尿管ノ實質内ニモ極メテ少數ノ聚落ヲ作レルヲ見ル。又莢膜ノ中或ハソノ近クノ組織中ニ比較的大ナル桿菌ガ、アル所ニテハ聚落狀ヲナシ、又アル所ニテハ散在性ヲナシテ存在スルヲ見ル。

E、「ヘマトキシリン、エオジン、レフレル氏メチーレン青」複染色標本ヲ檢スルニ、Dニテ檢セル所見ガ一層正確ナル事ヲ知リタリ、而シテ細尿管及ソノ周圍組織ノ或部分ニ存在スル僅微ナル圓形細胞ノ集積ニハ單純ナルモノト、其中心ニ比較的大ナル聚落ヲ認ムル所トアリ。サレド後者ノ圓形細胞集積中ニハ反應性ノ白血球ノ存在ハ認ムル事不能ナリ。

F、グラム、ワイゲルト氏複染色標本ニ於テハ、前記球菌ハ「グラム」陽性、桿菌モ亦陽性ナルコトヲ認メラレ、又一般ニ纖維素ハヨク染色サル。赤血球及白血球ノ陰影モ微カニ認メ得タリ。

G、バツベンハイム氏複染色標本ニ於テハDニヨリ染色セラレタル二種ノ細菌ハ本法ニヨリテモ著明ニ染色サル。

H、ワン、ギーソン氏染色標本ヲ見ルニ、一般ニ結締組織ハ膨化セル狀態ニアリ。而シテ血管壁ノ結締組織ハ特ニヨク染色サル。上皮ト結締組織トノ區別ハ一般ニ不明ナリト雖モ或個所ニテハヨク分明セル所アリ。

乙、參考書類ノ抜抄

(六)、參考書類トシテ交付サレタル鑑定書抜抄中ノ記事ハ頭部ニ於ケル創傷、等ノ記載及死因ニツキテ記載セラレタルモノニシテ本鑑定ニ必要ナル部分

ヲ抜抄スレバ

「二、頭部毛髪ハ左耳上ヨリ耳後ニ手掌大ノ部ヲ殘シテ剃去シ其有髪部ハ鬢血腫起シ、三個ノ創傷ヲ認ム。

1) 第一縱創ハ耳輪上部ニ長サ約四「センチメートル」、深サ骨膜ニ達シ、下端ハ耳輪ノ上縁ヲ切割ス。創口ハ哆開シ、邊緣ハ正シク其色暗赤色ヲ呈シ、架橋の纖維ヲ見ズ、創洞ハ半バ乾キ牛バ流動性ナル汚穢黃赤色ノ液ヲ以テ濕潤ス。

2) 第二縱創ハ左耳翼ノ後部乳嘴部ノ後方ニ存シ、第一創ト並行ス。其長サ、深サ、創口及創縁等ノ性狀ハ第一創ニ同ジ。

3) 第三橫創ハ第一創ノ上方、左顳頂骨後頭縁ノ下方ニ存シ、其長サ約五「センチメートル」、創口哆開シ深ク頭蓋骨ヲ截割シ頭蓋腔ニ通ズル穿通性骨創ニシテ、創縁正形、其色暗赤色ヲ呈シ、創内汚穢黃赤色ノ液ヲ以テ濕潤セラレ、切斷セル長サ約二「センチメートル」ノ毛髮數十本ヲ嵌入ス」

トアリ。

(七)、次ニ證人立野タツ訊問調書中本鑑定ニ必要ナル資料ヲ抜抄スレバ「四問、源一郎ガ怪我ヲシテ歸ツタ時ノ狀況ヲ申シ立テ見ヨ

答、昨年舊十月十日(新十一月廿五日)午後六時頃源一郎一人デ自宅ニ歸

リマシタ、其時頭ニ繃帶ヲシテ居タノヲ什ウシタノカト尋ネタ所源一郎ハ私ニ對シ實ハ喧嘩ノ仲裁ヲシタノガ原トナツテ酒ニ酔フテ居タノデ喧嘩ヲシテ斯様ナ事ニナツタガ妻ニ云フテ吳レルナト申シ二三分間位園爐裡ノ所ニ居タガ、「ムカツク」カラ速ク寢床ヲ布イテ吳レト申ス故寢床ヲ布イテ遣ツタ所其處ニ寢マシタ、其時ヨリ吐キソウニアルトカ云ツテ苦シガツテ居マシタ。

午後十二時頃カラ非常ニ狂ヒ出シマシタノデ自宅ニアツタ氣付藥ヲ飲マセマシタケレド一向ニ効キ目ガナイノデ十二時過ギ〇〇町ノ〇〇醫

師ニ來テ貰ヒマシタ、同番師ハ右カ左カ覺エマセンガ極小サイ物デ胸ニ一本皮下注射ヲ致シマシタ所余程鎮マリマシタソウシテ傷ハ明日來テ手當ヲヘル故若シ今晚狂フ様デアッタラ此藥ヲ吞マセヨト云フテ粉藥二三服ヲ貰ヒ受ケマシタ、ソレデ少シ苦シガリ相ニ爲ツタ時其粉藥ヲ吞マセテ居マシタガ朝ニナツテ復頭ヲ前後左右ニ振り廻シ、兩手ヲ傷口ノ所ヘ遣ツテ頭ヲ掻キ撚リ兩手ヲバタバタサセ、後ニハ立上ツテ荒狂フテ仕方ガナイカラ隣リ近所ヤ親戚ノ者ヲ雇フテ來テ手足ヲ帶ヤ紐デ縛ツタノデ少シハ荒レルノガ鎮マツタ様デアツタカラ午前十時頃其縛リヲ解イテ遣リマシタ十一日ノ午前十一時カ十二時頃〇〇醫師ガ見ヘテ前夜ト同一ノ注射ヲ一本致シ粉藥二服ヲオキマシタ、其時モ源一郎ハ荒レ狂フテ仕方ガナイカラ傷口ノ療治モ出來ナカツタノデ同醫師ハ水藥デ傷口ヲ拭キ取り尙傷ニ此膏藥ヲ付ケヨトテ水藥ト貝ニ入ツタ膏藥ヲ置キ、小便ヲ取ツテ持ツテ來イト云フテ歸ラレマシタ、ソレデ役場ヘ出テ居ル〇〇〇〇サンニ頼ンデ小便ヲ〇〇ノ〇〇醫師ノ所ヘ持タセテ遣リマシタ、翌十二日モ十三日モ十四日モ醫師ガ參リマセンデシタ、ソレハ十一日ノ日ニ貰フタ藥ヲ飲マズ毎日狂フノデアツタカラ醫師ヲ呼びニモ參リマセナンダガ十四日ノ午後十時頃遂ニ死亡シタ様ナ次第デアリマス(中略)

六問、傷ハ澤山シテ居ル様ダガ何處ノ傷ガ一番大キカッタカ

答、傷ハ額ヤ手ヤ腰邊リニモ澤山アツタガ湯灌ヲスル時ヨク見タラバ頭ノ三個ノ傷ノ中一個ハ傷口モ廣ク深サモ深く中ニハ骨ノ様ナモノガ落ちコンデ居タノガ能ク見ヘマシタ、夫レヲ家族ノ者ヤ親戚ノ者ハ斯様ナ大傷デ什ウシテ生キテ居ラレルモノカト申シタ様ナ次第デアリマス

(中略)

九問、源一郎ハ生前病氣ヲシタ事ガアルカ

答、若イ時カラ病氣ハシタ事ガアリマセン非常ニ強壯ナモノデアリマシ

一〇問、源一郎ハ酒ヤ煙草ヲノムカ
答、酒ハ一升位ハ十分ノムト云ヒマス、時ニヨレバ朝カラ晩マデノム様デアリマス」

トアリ以テ源一郎ノ負傷ノ狀況及死前ノ症候ヲ大略知ル事ヲ得タリ。

丙、考察

(八)、以上ノ検査記録及訴訟記録抜抄ニヨリ考察スルニ立野源一郎ハ大正〇〇年〇〇月〇〇日、頭部等ニ大ナル損傷ヲ受ケ、同日午後六時頃歸宅後間モナク吐氣ヲ訴ヘ、午後十二時頃ヨリ腦症狀ヲ惹起シタリシヲ以テ午後十二時過ギ醫師ノ診療ヲ受ケタルモ腦症狀ハ止マズ、依テ翌〇〇日午前十一時頃又醫師ノ診療ヲ受ケントセシモ傷口ノ處置ハ同人ガ荒狂フヲ以テ之ヲ施行スル事ヲ得ズ、續イテ源一郎ハ〇〇〇日、〇〇〇日及〇〇〇日モ亦荒狂ヒ、終ニ〇〇月〇〇日午後十時頃(舊〇月〇〇日)死亡セリ。

前記第六項鑑定書抜抄中ニアル(1)乃至(3)ノ傷ハ汚穢黃赤色ノ液ヲ以テ濕潤セリト云フ、即チ頭部ニ於ケル右創ハ明カニ傳染性創傷ニ陷レルモノナリ。

(九)、次ニ交付サレタル腎臟ニ關スル検査所見ニツキ考察セン。本腎臟ノ表面ニ於テ認メラルル多數ノ癰痕收縮樣陷凹ハ血管硬變性萎縮腎ニ認メラル、ソレト非常ニ近似シ居レ共本標本ノモノハ左ニアラズ、全ク一ノ腐敗的現象ナリ、血管硬變性萎縮腎ニ於ケル癰痕收縮ナレバ該個所ガ幾分他ノ部ヨリモ硬固ナル筈ナルモ、本標本ニ於テハ該個所ハ却ツテ他部ヨリモ軟ナリ、尙予ガ行ヘル實驗ニヨルモ家兎ヲ出血死ニ致シテ之ヲ直チニ攝氏三十七度孵籠ニ入レテ腐敗セシメタルモノニシテ十時間―十五時間ヲ經タルモノノ腎ニ於テモ同様ノモノ認メラル、決シテ血管硬變性萎縮腎ノモノニ非ザルナリ。

(十)、更ニ顯微鏡的検査ニ關スル考察ヲ廻ラサン。

「ヘマトキシリン、エオジン」複染色標本ニテ見ラルル絲綫體ノ廢類、細尿管ノ變性ト思ハル像、一般ニ核染色ノ不_レ等ハ死後ノ變化ニシテ、生前ノ狀態ヲ示スモノニ非ズ。故ニ勿論之ヲ病的變化ト考ヘ得ズ。

而シテ眞ノ病的變化アリヤ否ヤハ之等ノ死後變化ニ蔽ハレテ明確ニ認メ得ズト雖モ特ニ著明ナル病的變化ト稱スベキモノハナシト見テ可ナリ。又肉眼のニ見ラルル腎臟表面ノ陷凹個所ハ「ヘマトキシリン、エオジン」複染色標本ニヨルモ明カニ腐敗現象ニヨルモノナリト斷ジ得、サレド血管充盈及少許ノ圓形細胞ノ集積ハ生前ノ狀態ニシテ病的變化ト考ヘラル。其内充盈ハ別トシテ、少許ノ單純ナル圓形細胞ノ集積ハ立野源一郎ノ年齢ヨリ推シテ強チ病的變化トモ稱シ得ズ。又脂肪浸潤ノ如キモ見ル能ハズ、即チ立野源一郎ニハ萎縮腎其他著明ナル個有ノ腎疾患ハナキモノト推定ス。

次ニ尿毒症ノ有無ニ就テ考察ヲ廻ラサン。近時尿毒症患者ノ腎組織中ニハ尿素ノ鬱滯多ク、之ヲ「キサントヒドロール」反應ニヨリ檢シ得ト稱スルモノアリ、予モ信ズベキ報告ナラント思惟ス。然レ其本反應ハ施行法稍複雑ニシテ本標本ノ如キ「フォルマリン」液中ニ浸漬シアルモノニハ行フ事能ハズ。故ニ本説ヲ正確ナリトスルモ本腎臟ニ就テ之ヲ施行シ、之ニ依テ尿毒症ノ有無ヲ確言シ得ズ、サレド上述ノ検査ニヨリ著明ナル個有ノ腎疾患ナキガ故ニ尿毒症モナキモノト推定シテ可ナリト信ズ。更ニ「レフレル氏」メチレン」染色ヲナセルモノヲ見ルニ血管、特ニ腎盂ニ近キ部分ノ比較的大ナル血管内ニ多クノ球菌ノ聚落アリ、又中心ニ上述球菌ノ聚落ヲ有スル少許ノ圓形細胞ノ集積セル所アリ、之ニ由テ考フルニ之恐ラク生前ノ細菌像ニシテ、配列及集合ノ狀態其他「グラム」染色狀況ヨリ考ヘテ化膿性葡萄狀球菌ナラント推定サル。又莖膜及其附近ニ認メラルル桿菌ハ通常死體ニヨク見ラルル非病原菌ナリ。之等ノ細菌像ハ「バツペンハイム氏」複染色標本ニテモ認メラルルガ故ニ甚ダ確實ナルモノナリ。

又ワンギーソン氏法染色標本ニテ認メラルル結締織ノ膨化セル事モ死後ノ

變化ニレテ特筆スベキモノニ非ズ。

要スルニ血管充盈シ、ソノ中ニ栓塞性ニ球菌ノ純粹の聚落ノ多キヲ認メ得ルモ茲ニ反應の白血球ノ出現ヲ認識シ得ザルヲ以テ絕對の確實ヲナス能ハズト雖モ周圍ニ圓形細胞ノ少許集積セル所モアルガ故ニ立野源一郎ガ生前身體ノイヅレカニ本球菌ノ原發性病竈ノ存在シ、其處ヨリ本球菌ガ血流ニ現ハレ、敗血症ヲ起シ、所々ニ栓塞ヲ起セシモノニシテ反應の白血球ノ出現ハ死後ノ變化ノ爲メニ明確ニ認メ得ザルニ至リシモノナラン。

(十一)、上述ノ如ク立野源一郎ニ敗血症ノ存在シ居タリシ事ハ甚ダ確實性多シシカモソノ敗血症ハ細菌聚落ノ狀態及其他ヨリ考ヘテ急性ノモノニシテ、死前餘リ多クノ日數ヲ經過セザルモノナリ、而シテソノ程度ハ相當ニ重症ニシテ死因トモナリ得ルモノナリト推定サル。サレバ立野源一郎ガ死前ニ示シタル症狀ハ稍尿毒症ニ似ル所アリト雖モ諸種ノ事情ヲ綜合的ニ考慮ノ内ニ入ルレバ右症狀ハ腦損傷、之ニ供ヘル腦腔内出血及炎症、而シテ其結果來レル敗血症等ニヨルモノニシテ尿毒症ニ起因スルモノニアラズトスルハ最も合理的ト思惟セラル。

丁、鑑定

以上ノ如クナルガ故ニ鑑定スル事左ノ如シ。

一、立野源一郎ハ生前個有ノ腎臟病ニオカサレ居タル形跡ナク又尿毒症ニモオカサレ居ラザリシモノト推定ス。

二、然レ其相當重症ニシテ死因トモナリ得ル程度ノ敗血症ニ罹リ居リ、ソハ死前數日ニシテ發生セシモノナラント推定ス。

此鑑定ハ大正〇〇年〇月〇日着手

同〇〇年〇月〇日終了

年 月 日

住 所

鑑定人 醫師 何 某

Ein Gutachten, bei welchem eine Septikämie nach ausführlichen pathologischen Untersuchungen von zwei, aus einer alten Leiche isolierten Nieren als Todesursache angenommen wurde.

Von

KEIJI KURODA.

(Aus dem gerichtlich-medizinischen Institut der kaiserlichen Universität zu Kyoto.)

Dem Verfasser wurden von einem gewissen Untersuchungsrichter aus einem gewissen Gerichtshof zwei, aus einer alten Leiche isolierten Nieren gegeben und zwei Fragen zur Begutachtung vorgelegt:

1. Hatte der Gestorbene ein Nierenleiden oder Urämie zu seiner Lebzeit?
2. Wenn er jene hatte, seit welcher Zeit bestanden die Krankheiten und in welchem Grade?

Der Verfasser machte ausführliche pathologische Untersuchungen an den Nieren und gab folgendes Gutachten:

1. Es wird angenommen, dass der Gestorbene kein Zeichen von einem Nierenleiden, darum auch keine Urämie gehabt hat,
2. Dass er aber an einer ziemlich schweren, als Todesursache anzunehmenden Septikämie gelitten hat und dass die Septikämie einige Tage vor dem Tode auftreten sein mag.